

## まえがき

著者	佐藤 幸人
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
シリーズタイトル	研究双書
シリーズ番号	574
雑誌名	台湾の企業と産業
ページ	[i]-iii
発行年	2008
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00011625">http://hdl.handle.net/2344/00011625</a>

## ま え が き

本書は、アジア経済研究所が2006年度から2007年度にかけて実施した「台湾総合研究Ⅰ——企業と産業——」研究会（佐藤幸人主査，池上寛幹事）の成果である。なお，現在，若林正文教授を主査にむかえて「台湾総合研究Ⅱ——民主化後の政治——」が進行中である。その成果は2009年秋に刊行する予定である。

アジア経済研究所（アジ研）は台湾経済研究の長い伝統を持っている。これまで主な成果として，笹本武治・川野重任編『台湾経済総合研究』上・下・資料編（1968年），谷浦孝雄編『台湾の工業化——国際加工基地の形成——』（1988年），服部民夫・佐藤幸人編『韓国・台湾の発展メカニズム』（1996年）を上梓してきた。しかし，『韓国・台湾の発展メカニズム』以後，10年あまり，台湾経済について総合的に論じた研究書はアジ研から刊行されていない。わたしたちは，2000年代のはじめの10年という現在が，アジ研の伝統を継承しつつ，新たな総合的研究をおこなう時機であると考え，研究会を組織した。

もちろん，日本だけを見ても，アジ研以外から多くの台湾経済に関する研究の成果が発表されている。しかし，そのなかでアジ研の役割は独特である。研究会のメンバーが2年間，20回あまり集まって，通常3時間，時にはまるまる1日かけて議論し，研究を深めていくというスタイルは，ほかではなかなかみられない。そのような議論を通して生まれた成果は，台湾経済研究の中でユニークな貢献をしようと信じている。

また，このように研究活動のコーディネーターの役割を果たすことは，アジ研の責務であるとも考えている。日本の大学や他の研究機関に所属する研究者の中で，台湾についてのみ研究や教育をすることが許されているケース

はほとんどないだろう。台湾は日本にとって、地理的にみても、社会的な繋がりでみても、もっとも近い隣人のひとつであることを考えると残念なことだが、それが現実である。そのなかにあって、アジ研は1人の研究者が台湾を専門的に研究することが可能な唯一の研究機関とっていいだろう。それはとても幸福なことであるとともに、重い責任をとまなっていると考えている。

本書は8つの章と序章から構成されている。日本で活発に台湾経済を研究している7人の研究者が研究会に集まった。さらに、台湾の東海大学の劉仁傑教授に1章の執筆を依頼した。地域研究にとって研究対象の国の研究者との交流は不可欠である。わたしたちもまた、劉教授が企画したシンポジウムで報告したり、本に執筆したりしている。本書はこのような双方向的な交流の中で生まれたのであり、台湾における研究のダイナミズムとのリネージュを保っている。

本書の内容の概略は、序章を読んでいただきたい。ここでは特徴をひとつ提示しておく。本書が目指したのは良質の論文集である。「良質」かどうかは読者のご判断にお任せしたいが、「論文集」には2つの含意がある。ひとつは各論考の独立性が高いということである。それぞれの章は単独の論文としてのまとまりとレベルを十分に保持できるように努力した。もちろん、だからといって、本書が寄せ集めというわけではない。上述のように、長期間にわたる濃密な議論をおこなっているので、本書の論文の間には一定の共通認識が土台としてある。それゆえ、各章を読み合わせれば、台湾経済像を立体的に構想できるだろう。また、序章では複数の章に跨るトピックや章間の関係について、編者としての見方を示してあるので、参照していただきたい。

もうひとつの含意は、本書はトピックを網羅的に設定していないということである。読者の中には台湾経済研究にとって重要なトピックが欠けていると考える人がいるかもしれないが、本書の8つのトピックは、研究会のメンバーそれぞれが重要性に加え、研究の必要性が高いと認めたものである。各メンバーは既存の研究において議論が確定しているトピックよりも、むしろ

未知の部分あるいは論争の余地が多く残され、さらに分析を深める必要があると考えた問題を積極的に発掘し、選択し、挑戦したのである。

最後に、わたしたちの研究活動は、当然のことながら、多くの方々によって支えられてきた。講師をお願いした新宅純二郎（東京大学）、安倍誠（アジア経済研究所）、呉博群（東京大学博士課程）、上村泰裕（名古屋大学）、沼上幹（一橋大学）の各氏からは、非常に参考になるお話をうかがうことができた。台湾や日本での調査は、さまざまな方からのサポートなくしてはなしえなかった。審査過程でレフリーからいただいた的確なコメントは、本書の質を確実に引き上げている。アジ研の編集部門のおかげで、本書は本としてきりっとしまった体裁を整えることができた。ほかにも多くの方から助けていただいた。わたしたちがこれらの方々からいただいた暖かいご支援とご協力に対して深く感謝申し上げたい。

2008年秋

編 者